

加納宣康（監修）
三毛牧夫（著）

腹腔鏡下大腸癌手術 発生からみた筋膜解剖に基づく手術手技

杉山保幸

帝京大溝口病院教授・外科科長

本書は現在のトピックスの1つである腹腔鏡下大腸癌手術の手技を解説しているの、大きなカテゴリーとしては医学書に分類されることは論を俟たないが、それだけでは済まされないと感じたのは小生だけであろうか。カテゴリーを細分類すると、タイトルからは「手術手技書」となるが、よく読んでみると「腹部の臨床解剖学書」としたほうがよいともいえる。また、「消化管外科医が手術を修得するための基本的な心構え」といった教育論書でもある。さらには「大腸癌手術における覚書」といった著者自身のエッセイというように判断しても妥当かもしれない。文章の端々に著者の外科医としてのポリシーが述べられ、時には人生観も言外の意として込められているからである。

著者が豊富な手術経験と莫大な数の論文検索を基にして得た解剖学的知識と手術手技を、初心者立場に立って解説してあるため、非常に理解しやすい内容になっている点が本書の特徴である。すべての図がハンド・ライティングで描写されており、カラー写真が多用されている従来の手術書とは趣を異にしている。“手

術記事の中の図を、下手でも自分で描けるのが真の外科医である”と駆け出しのころに恩師から教えられたことを今でも鮮明に記憶している。撮影技術の進歩で写真やビデオとして手術記録を残すことがほとんどという現況で、術中体位、ポート・鉗子の挿入図、腹腔内での操作状況、などすべてが手描きである点が、著者の“外科医魂”の現われでもある。同時に、随所で断面図を挿入して読者の三次元的な理解をアシストしているところは心憎いばかりの教育的配慮である。

また、腹腔鏡下手術のみに焦点を当てておらず、常に開腹手術の場合との対比を念頭に置いて解説が進められているのも賞賛に値する。とりわけ、S状結腸切除術および右側結腸切除術の際の、内側アプローチか外側アプローチかに関する解説においてはその点が詳述されており、興味深いものであった。大腸癌に対する手術において、腹腔鏡下で手術を行うのか、それとも開腹で行うのかはアプローチの違いだけであり、本質である「過不足のない手術」をめざすことを強調して、その目的に合致した手術を遂行するための知識を

読者に伝授することを基本理念としている姿勢には敬意を表したい。

一方、用語の定義を明確にし、共通の認識の下でディスカッションを行うことが必要不可欠であることを冒頭で提唱しておいてから、解剖および手術手技の解説を展開しているプロセスにも、著者のサイエンティストとしての非凡さを垣間見ることができる。基礎編の最後に記述された「わが国の『大腸癌取扱い規約 第7版』は、これらの現実から離れた考察のなかにあり、片手落ちと言わざるをえない」は、経験と知識の裏付けがなければできない批判であるのは火を見るよりも明らかである。

今後、本書が多くの外科医や解剖学・発生学・組織学を専門とする基礎医学者によって精読され、賛否両論が著者の元に寄せられて、結果的に大腸癌患者の診療に福音がもたらされることを願ってやまない。

●A4/頁 232/2012 年/定価 12,600 円
(本体 12,000 円+税 5%)

[ISBN978-4-260-01476-2]

医学書院 刊